

臓器提供における 共感性の効果に関する研究

中 澤 清

問 題

向社会的行動 (prosocial behavior) を生起させる要因のひとつに共感性 (empathy) があるといわれている (Mehrabian & Epstein, 1972; Krebs, 1975; Eisenberg & Mussen, 1978; Archer et al., 1981)。人は他者の困惑や苦悩を認知することによって、自己の内部に同様の情動が生じ、その情動の水準を下げるため、他者に援助の手をさしのべるというプロセスが考えられる (Cork et al., 1978)。共感的行為には援助行動と逃避行動 (Batson et al., 1986) が仮定されるが、これまでの向社会的行動と共感性との関係を見た研究では、向社会的行動の際の損失が考慮されていなかった。向社会的行動である分与行動や援助行動には多かれ少なかれ援助者には、心理的・物理的損失を伴う。援助に伴う損失があまりに大きいときには、情動水準を下げるためにその状況から物理的・心理的に遠ざかろうとする。損失が大きいと予想される状況にあっては、これを恐れて向社会的行動の生起が躊躇される。前回の研究 (中澤, 1993) では、このような援助に伴う損失 (援助コスト) の条件を比較して、小さな親切のような援助コストの小さい条件では共感性の高低が援助行動に結びつくが、援助コストの大きい条件では共感性が援助行動の要因とはならないことを示した。共感性の高い人は、高援助コストの援助場面では、情動的混乱を引き起こし、その状況に耐えられなくなるのではないかと考えられる。

このような援助に伴う損失を援助行動の要因のひとつに入れなければならない

い時、一番の問題点は援助者によって援助コストが異なることである。従って援助コストが関係する研究では、援助コストの大小の設定が重要になる。前回の研究では、援助コストの設定がなされていたが、すべての被験者が等しく設定した援助コスト値を感じたわけではない。被験者個人にとって設定通りのコスト値を示しているかどうかは分からない。どのような被験者においても、設定通りのコスト値をとらえさせるためには、極端な援助コスト値をとる援助行動をさせるのがよい。誰もが即時に返答に困るような、個人の援助コストの閾値をこえるような援助を考えればよい。そこで臓器移植のような、どの人にとっても大きな負担となる援助に焦点が絞られることになる。

今回の研究でも前回同様援助行動を取り上げ、援助行動の内的要因として共感能力と援助に伴う損失の関係を調べる。援助行動として、どの人にとっても大きな心理的、身体的負担になる臓器移植を取り上げ、高援助コスト条件では共感性と規範意識とどちらが援助動機になっているのかを調べる。

方 法

共感性尺度 これまでの研究同様 PEAS (Picture Empathy-Aggression Scale) 成人用 (中澤, 1981) を用いた。PEAS は攻撃を抑制する要因のひとつに共感性を考え、被攻撃者の苦痛が共感的に自己の苦痛として認知されると、それ以上攻撃を加えることができないという Feshbach (1964) の仮説に基づいて構成されている。この仮説に従えば、攻撃的状況において共感能力の高いものは、対象が心理的、物理的を問わず、近ければ近いほどその昔痛が伝わるために、より強い情動が生じ、攻撃が抑制される。しかし共感能力の低い者は、相手の苦痛の認知はその距離に関係がないので、攻撃の強さを変えることはない。

PEAS は PF スタディと同形式に構成されており、日常よく経験する16の欲求阻止場面が線画で描かれており、フラストレータに対する反応を吹き出しに記入させるようになっている。そしてフラストレータが目の前にいる場面と、

いない場面の言語的攻撃反応の数を比較することによって共感能力を知ることができる。つまり高共感能力者はフラストレータが居合わせない状況での攻撃反応数は平均的に産出するが、フラストレータを目の前にした状況での攻撃反応数は少なくなる傾向がある。これに対して低共感能力者は相手を前にした攻撃状況での反応数の方が多いか、あるいは状況に依存しない攻撃をする傾向がある。

腎臓移植意識調査 実在する「社団法人腎臓移植普及会」という団体名を借りた記名の腎臓移植意識調査を行った。この意識調査は、フェイスシートに腎臓病が臓器移植によらなければ回復不可能なこと、腎臓提供は死体腎として行われること、臓器提供登録者が不足しており、10万人の腎臓提供者の登録が望まれることなどの説明があり、続いて腎移植に関する一般的な意識調査に記入し

表1 援助行動に関する規範意識質問紙の項目

あなたが困っている人を援助するときの気持ちについて答えて下さい。

思わない	0点
そうかもしれない	1点
そう思う	2点
まさにそうだ	3点

- | | |
|---|-------|
| 1. 人から助けってもらって嬉しかったことがあったので、お返しをしたい。 | 互恵性 |
| 2. 私達は障害を持つ人や病気の人を援助する責任がある。 | 社会的責任 |
| 3. 不幸な人の力になるのは人としての義務である。 | 公平 |
| 4. 援助することは社会的責任を果たすことである。 | 社会的責任 |
| 5. 私は幸福だから、それを分けてあげたい。 | 公平 |
| 6. 私達はいつかどこかで人に助けられる訳だから、助けることができる時には助けてあげたい。 | 互恵性 |
| 7. 健康な者は病気の人の方の力にならなければならない。 | 公平 |
| 8. 人によいことをすると、それは必ず自分に返ってくる。 | 互恵性 |
| 9. 救いを求めている人には見返りを期待せず援助の手を差しのべるべきである。 | 社会的責任 |

てもらおうようになっている。

この意識調査の中には援助行動に関する規範意識の調査項目が挿入されている。この援助行動に関する規範意識質問紙には社会的責任、公平、互惠性の3種の規範について各3項目、合計9項目の質問が用意されている。なお回答は4件法（0点から3点）で行う。それを表1に示す。

意識調査の最後に、「あなたも（腎移植の）登録をしたいと思いますか」という質問項目があり、それに「はい」と答えた人に対して「登録のための資料をお配りしたいので、『はい』と答えられた方はご住所をお書き下さい」という依頼の文章を置いてある。これによって無責任な回答や非現実的な規範回答を回避し、援助コストを高める操作を行った。この項目への住所の記入によって援助者とみなした。

被験者 女子の短期大学1年生145人。

手続き 腎臓移植意識調査は保健体育講義の時間にその担当教員によっておこなわれた。この調査を行った同じ週で、この調査より前の心理学の講義時間にPEASを実施した。約230人の学生がどちらかの調査を受けており、両方とも受験していたのは145人であった。なお後日、心理学の講義の中で腎臓移植の意識調査が虚偽であり、心理学的研究の目的のためであることを説明した。

結 果

腎臓移植意識調査に住所を記入していたのは31人であった。腎臓提供の資料送付を希望するかという項目に「はい」と答えていても、住所を記入していない者はこの数に入れていない。この人たちを援助群、残り114人の人たちを非援助群と呼ぶ。

表2は援助群と非援助群のPEAS得点を t 検定した結果である。両群の間には有意な差を見いだすことができなかった。

表3～6は援助群と非援助群間の規範意識質問紙の社会的責任，公平，互惠性の下位得点およびそれらの合計得点を t 検定した結果である。社会的責任，互惠性には有意差が生じており，規範意識全体としても差があることが確かめられた。

表2 援助群と非援助群との共感性得点の t 検定

	援助群	非援助群
人数	31	114
平均	2.0	2.3
標準偏差	1.27	1.31
t		.928
$p <$		n. s.

表3 社会的責任についての規範意識得点の援助群と非援助群の t 検定

	援助群	非援助群
人数	31	114
平均	5.7	4.9
標準偏差	1.62	1.48
t		2.60
$p <$.01

表4 公平についての規範意識得点の援助群と非援助群の t 検定

	援助群	非援助群
人数	31	114
平均	5.1	5.7
標準偏差	2.03	1.66
t		1.69
$p <$		n. s.

表5 互恵性についての規範意識得点の援助群と非援助群の t 検定

	援助群	非援助群
人数	31	114
平均	6.7	5.8
標準偏差	1.82	1.56
t		2.73
p		.01

表6 規範意識総得点の援助群と非援助群の t 検定

	援助群	非援助群
人数	31	114
平均	17.5	16.4
標準偏差	2.46	2.26
t		2.26
p		.05

表7 親近者における腎臓患者の有無と腎臓提供の意志（人数）

		腎臓患者の有無		
		有	無	
提供の意志	有	7	24	31
	無	13	101	114
		20	125	

友人を含めた身近な人の中に腎障害を持った人がいることが、腎提供の動機になるのではないかと考えられるので、親近者に腎臓病患者がいるかどうかを問うたものが表7である。そのカイ2乗検定を行ったところ、親近者における腎臓障害者の有無は直接的な動機にはなっていなかった ($\chi^2=2.56$, $df=1$, n.s.)。

考 察

腎臓移植に関する資料の送付を希望する者は31名で、全被験者の約13%であった。実際に死体腎の提供者として登録するのではなく、登録のための資料の送付ということにおいてさえ、この程度の者しか希望しなかったのであるから、援助コストの設定はうまくいったようである。援助行動に関する調査は社会的望ましさが入り込みやすく、工夫を要する。本研究では、被験者は本当のアンケート調査であり、資料送付のための住所を記入すれば、提供者として登録しなければならないと信じたのであろう。そのようなわずらわしいことにかかわりたくないと住所を記入しなかった者が87%もいたのである。本研究の援助コストの設定は極めて高いコスト値を示したことになる。

「あなたが死んだ後、あなたの腎臓を腎臓病患者に提供することを登録しますか」というような単なるアンケートの質問項目では、仮定的状況での仮定的援助行動であって、援助コストが必ずしも高い値を示すとは限らない。援助行動が個人の中で規範レベルで存在するのか、実際に行動レベルとして見られるのかといった問題もあるので、仮定的場面ではなく、実際の行動場面における援助行動を調査することが好ましい。

さて援助群と非援助群間には共感性得点に有意な差は見られなかった。腎移植という援助行動は、苦痛を目のあたりにしている訳ではないので、その援助行動には共感性の要因が働きにくいのかもかもしれない。しかし表7に示したように、親近者の中に腎臓病患者がいても援助を申し出ない被験者がいる。死んだ後とはいえ、自分の体が傷つけられ、腎臓が取り出されるということは、日本人にとってはタブーである。そういう意味で腎臓提供の登録は大きな心理的損失を伴うのであろう。またそれが共感性の高い人にとって不安や恐怖心を呼び起こし、援助行動から目を背けてしまう結果になったのかもかもしれない。

共感による援助行動の動機付けに関しては複雑な要因が介在することが知られている。人は他人の苦痛を自分のものとしたとき、その苦痛を減じるために

援助行動をするのではなく、その人が持つ恥や罪の意識の有無や自尊心の有無によって、ある結果を予想し、その予想が罰や報酬に結びついているので援助行動が生じると考える研究者 (Archer et al., 1981; Cialdini et al., 1987) もいる。つまりすなわち援助は苦痛軽減のための道具の一つでしかないというこの主張は、人は共感的に生じた苦痛を援助行為によって減じることができない時には援助を放棄する考えられる。共感性の高い者にとって援助コストがあまりに大きい時には援助以外の方法で苦痛軽減を行い、その結果援助行動は生じなくなるということの意味している。

また共感によって生じた感情が他人の苦痛の認知のためでないとして認識した時、人は援助を行わないという研究結果 (Harris & Huang, 1973) もあり、共感的感情が生じても援助行動とは負に働くとも考えられる。共感がどのような過程で援助行動と結びつくのかということは容易に解明できることではないが、いずれにしても前回の研究同様の結果が出たわけである。

このような援助コストの高い援助行動ではやはり規範意識が大きな要因になっていることが分かった。規範意識とはその文化において期待される理想的行動規準に基づく認識の様式をいうが、援助コストが高い状況では大きな要因となることがわかった。誰かがするだろうといった責任の分散は、援助コストの高低に係わらず援助行動の障害になる。そのような時に大きな効果を示すのが規範意識である。他人を助けることは損得の問題ではない、人間として当然のことであるといった規範意識があれば、援助コストにかかわらず、援助が行われるであろう。規範意識は苦痛表出場面との直接性は関係がないので、その場を遠ざかるという方法では援助行動から逃れることはできない。さらに超自我に属するものであるので、不安や恐怖などの情動にも影響されることのない援助動機である。

しかし単に共感的に他人の苦痛を自分のものとしただけであれば、その苦痛除去に伴うコストが大きい時には、見て見ぬ振りをしたり、知らぬ顔をしてその場を立ち去り、物理的距離をとることにより、共感によって高まった援助動因を軽減させることができる。共感能力の高い者は苦痛の直接性が援助行動の

大きな要素であるから、苦痛表出場面からの直接性が乏しくなればなるほど無視できるようになる。

これまでの研究で援助コスト的側面からアプローチしたものはなく、本研究は共感性が援助行動の動機であるとする研究と対立するものである。たとえばホスピスで死にゆく人たちに対してどのような援助ができるのかを考えると、健康な者にできることは僅かである。ベッドのそばでただ手を握ってあげることしかできないとしても、健康な者にできる最大の援助である。共感性の高い者はこのような状態に耐えられないのではないかと考えるのは、見当違いであろうか。

しかし援助コストがあまりに大きいとき、必ずしも直接的な行動でなくとも、援助行動がみられるかもしれない。我々が予想するよりももっと異なる方法で行われるのかもしれない。このような研究で用意された行動だけが援助行動とは限らない。共感性がどのような種類の援助行動と結びついているのか、どのような過程を経て結びついているのかを検討することができなくては、この領域の発展はありえない。

要 約

前回の研究は、これまで援助行動の要因と考えられてきた共感性が援助コストに依存することを明らかにした。すなわち援助コストが低い状況では共感性が働いて援助行動を生起させるが、援助コストが高い場合には共感性は援助行動の要因にはならないことがわかった。

本研究は援助コストが高いと考えられる臓器提供という援助行動を通して、共感性と援助に関する規範意識のどちらが要因となっているかを調べた。腎臓移植意識調査を用いて援助コストを操作して高援助コスト状況を設定し、腎臓移植提供の登録希望者と非希望者の共感性と規範意識を測定した。

その結果希望者と非希望者の間に、共感性には差が見られなかったが、規範意識には有意差が生じた。自分の力ではどうすることもできないとき、共感性

はその状況から逃避する動機となり、規範意識はそれに立ち向かわせる力となることがわかった。

参 考 文 献

- Archer, R. L., Diaz-Loving, R., Gollwitzer, P. M., Davis, M. H. & Foushee, H. C. 1987 The role of dispositional empathy and social evaluation in empathic mediation of helping. *Journal of Personality and Social Psychology*, **40**, 786-796.
- Batson, C. D., Bolen, M. H., Cross, J. A. & Neuringer-Benefiel, H. E. 1986 Where is the altruism in the altruistic personality? *Journal of personality and Social Psychology*, **50**, 212-220.
- Cialdini, R. B., Schaller, M., Houlihan, D., Arps, K., Fuitz, J. & Beaman, A. 1987 Empathy-based helping; Is it selflessly or selfishly motivated? *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 749-758.
- Coke, J. S., Baston, C. D., & McDavis, K. 1978 Empathic mediation of helping: Two-stage model. *Journal of Personality and Social Psychology*, **36**, 752-766.
- Eisenberg, N. & Mussen, P. 1978 Empathy and moral development in adolescence. *Developmental Psychology*, **14**, 185-186.
- Feshbach, S. 1964 The function of aggression and the regulation of aggressive drive. *Psychological Review*, **71**, 257-272.
- Harris, M. B. & Huang, L. C. 1973 Helping and attribution process. *Journal of Social Psychology*, **90**, 291-297.
- Krebs, D. 1975 Empathy and altruism. *Journal of Personality and Social Psychology*, **32**, 1134-1146.
- Mehrabian, A. & Epstein, N. 1972 A measure of emotional empathy. *Journal of personality*, **40**, 525-543.
- 中澤 清 1981 成人用エンパシー尺度に関する研究 九州女学院短期大学学術紀要, **6**, 81-94.
- 中澤 清 1994 向社会的行動における共感能力と援助コストの関係に関する研究 人文論究, **43**, 2.